

和紙作りの道具

八代市宮地^{みやじ}で使われていた道具を紹介します。

叩き石

紙の原料のカジ(楮)の繊維を叩いてほぐす時に下に敷く石。



オオスゲシャギ

オオスゲは、トロロアオイのこと。オスゲとも呼ぶ。紙を漉くときに不可欠な粘り成分は主にトロロアオイから取った。

これは、乾燥させたトロロアオイの根を叩いてつぶすための道具。つぶした根は水の中に漬けておき、布でこして使った。



桁と簀

紙を漉くときに使うもの。桁に簀をはさんで使う。池田広の「製紙生活三十年」(『夕葉』6号所収)によると、握り手のついた桁は、明治になって土佐から伝えられ、それ以前は「つかみ」といい、握り手のない桁で漉いていたという。



刷毛

紙を板にはって乾燥させる時に使ったもの。よい紙や薄い紙の時は馬毛の刷毛、普段はシュロ製の刷毛を使ったという。



型板

紙の上にこの板を乗せて裁断する。障子紙用の型板。宮地では、障子紙用の型板は場形と延形の2種類が残っており、一般家庭では主に場形の障子紙が用いられていた。延形は、場形に比べて2.5cm程幅が広く、八代郡内や鹿児島方面で用いられていたといわれる。



紙切り包丁

紙を裁断するための包丁。中華料理に使う包丁のような形をしている。使い込んでいくと元の形がわからないほど刃がへってくる。たくさん重ねた紙をきれいに裁断するのはとても難しかった。宮地には、紙切りを専門にする職人がいて、型板や包丁を持って各家を回った。



ヘラ

ヘラという木の皮。紙の梱包に使った。また、漉いた紙を重ねていく時、はがしやすいように紙と紙の間に挟むのにも使った。



ホング甕

ホング(反故、使い古した紙)を細かくちぎって漬けておいたり、晒し粉を溶かすのに使ったりした。ホングは、再び紙に作り直された。

障子紙包み紙

紙を漉いていくとだんだん原料がへっていき、最後には販売できるような均一な厚さの紙が漉けなくなる。製品の包み紙はその最後に残った原料で漉いた紙を2~3枚分重ねて乾燥させて作ったもので、原料の無駄がないよう工夫されている。

障子紙は、300枚を1束として、それを3つ折にしたものを2組(合計600枚)入れ、下包み、上包みの順にかぶせて梱包した。ひもには、ヘラや、裁断した紙の切れ端で七島イをこよりのように巻いたものを使ったという。



製品印

出来上がった製品には、それぞれの家で名前を付けて包み紙の表に印を押していた。

紙の白さをアピールする「雪」という字を使ったものが多く見られる。



九曜紋付の紙櫃

御用紙漉きを務めた家に残っていたもの。両側面に細川家の家紋である九曜紋が見える。これに御用の紙を入れて運んだと思われる。



黒塗り張り板

紙を漉いて水分をある程度取った紙をこのような板に刷毛で張り付けて乾燥させる。

特にこの板は、漆を塗って表面を滑らかにした特別なもので、宮地の御用紙すきの家に藩から支給されていた。高級紙の水玉紙を乾燥させるのに使ったと言われる。

